



津南ロータリークラブ週報

第2630地区 ROTARY CLUB OF TSU-SOUTH



2020～2021

例会日/毎火曜日
例会場/結城神社 津市藤方2341
事務所/津市大門7-15
都シティ津1F
TEL 225-2373 FAX 213-6175

会長/何川 高
幹事/日南田隆司
E-mail: src.tsu@dream.ocn.ne.jp
ホームページ: http://tsu-minami-rc.com/

第2615回例会 2020年12月8日(火) 天候 晴

— 12月は疾病予防と治療月間 —



例会予定

- 12月15日(火) 会員卓話 大熊 将弘会員
- 12月22日(火) 上半期最終例会
会長上半期報告
- 12月29日(火) 特別休会
- 1月5日(火) 特別休会

進行担当 (林SAA)

国歌斉唱 ロータリーソング 我等の生業

出席報告 (清野委員)

12月8日 出席率 46名中 36名 78.26%
11月24日 修正出席率 46名中 46名 100.0%

ニコBOX (大熊委員)

- 何川 高君 • 本日は奥田邦雄会員の会員卓話です。奥田会員楽しみにしております。
• 一昨日は南友会ゴルフコンペがあり、同伴競技者の伊藤孝行会員、今野会員にはお世話になりました。
- 日南田隆司君 • 本日は会員卓話です。奥田会員よろしくお申し上げます。
• 来週の例会場も結城神社様です。お間違いのないようにして下さい。
- 村木 正二君 奥田さん、本日卓話御苦労様です！
竹内 敏明君 今西さん、有りがとうございました。
奥田 邦雄君 拙い卓話で大変恐縮です。
今野信太郎君 6日(日)好天に恵まれ、南友会ゴルフにご参加頂きました皆様、お疲れ様でした。千原会員、西井会員のご協力に感謝して。
- 大熊 将弘君 先日は南友会ゴルフコンペで優勝させて頂きました。ご一緒させて頂きましたメンバーの皆様に感謝いたします！

会長報告 (何川会長)

- ◆ 本日はのちほど奥田邦雄会員の卓話をお願いしております。奥田会員よろしくお祈いします。
- ◆ さて、きょう12月8日は、79年前に太平洋戦争が始まった日であります。この日から、3年8か月にわたるアメリカとの戦争が始まりました。日本時間の12月8日午前3時頃、現地時間の7日午前8時頃でした。ハワイの真珠湾を日本の航空部隊が襲い、アメリカの戦艦を多数破壊しました。しかしアメリカの空母を打ち漏らし、後にミッドウェー海戦で日本の空母4隻を一挙に失い、それ以降、日本は敗勢に追い込まれていきます。アメリカ合衆国は当時も今も、世界一の大国であります。そのアメリカに挑んで完敗した日本は、今やアメリカの同盟国となっております。来年から、アメリカのバイデン新政権と、日本の菅政権との新しい関係が始まります。より良い関係を築いてもらい、コロナの終息した後の明るい世界を作り上げて欲しいと、願わずにはいられません。

幹事報告 (日南田幹事)

- ★ 2021年台北国際大会についてのご案内の件
- ★ 次年度理事役員担当部門の件
- ★ 12月15日(火) 例会終了後理事会開催の件
- ★ 福本ガバナー補佐ご挨拶の件

委員会報告

- 川喜田 久会員に米山奨学生カウンセラー感謝状表彰



奥田邦雄会員の卓話楽しみにしています！
宮崎吉史君、山本哲司君、西井健之君、吉村哲夫君、千原一典君、庄司正樹君、杉山直士君、伊藤孝行君、吹戸研一君、高林 学君、刀根大士君、樋口直人君、竹内敏明君、鈴木康義君、大川吉崇君、飯田 聡君、川喜田久君、澤田勝志君、今西孝彰君、岡部宏司君、薄井美弥君、羽根昌江君、林 裕行君、伊藤 仁君、大池雅之君、細山田誠二君

ガバナー補佐経過報告

中勢伊賀グループガバナー補佐
福本 毅 様

ガバナー補佐を受けさせていただいて5ヵ月経ちましたが、今年度は新型コロナ感染拡大でロータリー活動もことごとく中止や延期となり、思いもよらない事態に困惑しています。この様な時期にガバナー補佐訪問は如何なものかと考えた結果、書面での経過報告で済ませることになりましたので、訪問は中止したいと思っております。

万年筆の話

奥田 邦雄 会員

入会間もない頃、先輩にロータリーの卓話とは第一にタイムリーな話題でなければならない、第二に30分という短い時間の中エスプリを話さないと言われました。本日はそうではありませんが、万年筆とインクの卓話をさせていただきます。

文房四宝

元来、文人の書齋を文房（厨房などもおなじか？独房？ふさは部屋とか小部屋）といい、書齋で書画に用いる用具をも文房と称した。そのうち特に大切な筆、硯、紙、墨を文房四宝と呼ぶ。すでに中国では漢代の頃から、これらの文房具を鑑賞し、（硯を水に入れて鑑賞するという話も聞いたことがあります。）唐代になって、この四宝を文房の必需の用具として、さらに良質の精巧なものが制作されるようになった。日本語の「文房具」というのはもともと、「文房」つまり書齋に備えておく道具、といった意味の表現であり、いわゆる「書きもの」をするのに必要な道具、オーソドックスなところでは筆記用具、紙類（ノート類も含む）、鋏（やペーパーナイフ）等々を指している。文書を書いたり、（紙の）手紙を読んだり書いたりするのに必要な道具類のことである。短く言う時は「文具」と言う。

万年筆が日本に入ってきたのは、1884年（明治16年）、横浜のバンダイン商会が輸入し東京・日本橋の丸善などで販売された。当時は後半部分がほぼ英名の直訳である「針先泉筆」と呼ばれており、「萬年筆」と命名したのは、1884年に日本初の国産万年筆を模作した大野徳三郎と言われている。しかし、末永く使える、という意味で、「万年筆」の訳語を与えたのは内田魯庵というのが通説である。日本の万年筆製造は第一次世界大戦後に盛んになり、統計上は不詳であるが1940年にはピークを迎え、世界第2位の輸出国となっている。1950年代および2010年代には年間およそ1000万本前後が日本から輸出されている。

万年筆の文化史

万年筆はペンとともに1960年代頃まで、手紙やはがき、公文書など改竄不能な文書を書くための筆記具として主流でありました。インキには証券用インキというインキ消しというものでも消えないインキも販売されていました。今現在ではインキ消しを製造しているメーカーはないと思われます。時代と共に、徐々にボールペンに取って代わられ、1970年代に公文書へのボールペンの使用が可能になり、また書き味に癖がなく安価な低筆圧筆記具である水性ボールペン（東京サミットでサインに使用されたペンてるだと思ふ）が開発されたことにより、万年筆は事務用・実用筆記具としてはあまり利用されなくなっている。しかし、万年筆の希少性・独自性が見直され、趣味の高級文具として復権の兆しが見られる。また、今日では万年筆を扱った書籍や雑誌が刊行されるようになっている。

容赦をお願いします。

この5ヵ月間、上野地域は短縮例会、津地域は8月、9月は休会でしたが、名張、名張中央においては、皆さんのご協力メンバーのご協力により感染対策を徹底して、今まで通りの例会をして頂いていることに感謝とクラブの模範です。ただ、GTMが中止しせざるを得なかったことは誠に残念なことで企画に関わって頂いた方々には申し訳なく思っていますが、これから地区大会に向かって進めてまいりますのでご協力の程よろしく申し上げます。会員維持に関して 10月末時点で、97名の入会者（内、女性7名）退会者34名、会員総数3,151名（内、女性175名）となっています。

筆記具としての特徴

万年筆は、長年使い続けられる個人用の筆記具として、また手紙やフォーマルな場面に適した筆記具として、またステータスシンボルやコレクションの対象として位置付けられている。

万年筆は、低筆圧で筆記でき、ペン先の設計により様々な筆跡や書き味が得られる。（13パターン（ペン先が上を向いている左利き用も）使い続けることでペン先に使用者特有の癖が付くため、貸し借りには向かないが、本人に馴染んだ書き味になってゆく。筆跡に余分なインクが残りやすいため、これを吸い取るブロッカーが利用されることもある。吸取り機と吸取り紙である

インクを補充しながら長年使われるため、定期的な洗浄といったメンテナンスを必要とするが、ペン先の接触部分（ペンポイント）に耐摩耗性の高いイリドスミン合金（いま北海道で採掘していますが副産物として取り出しているのだから先どうなるのか心配です）が使用されるなど長寿命に設計され、好みのインクを入れて使用できる（現在約100色、スポイドでインキポッドから移すこともできますが面倒です）。高級品を中心に、ペン先に耐腐食性や弾力のある金を用いたり、様々な工芸装飾を施したり、手作業で製造・調整されたものも少なくなく、既製品のほか特注品も作られる。メーカーや店舗によっては、ペン先の調整や修理といったアフターサービスも提供される。ペン先ですが金とペン先全体のフォルムが万年筆独自のしなりを生み出します。ペン先には14金が使われ万年筆特有の適度なしなり（弾力）を生み出します快適な筆記感と文字の抑揚や微妙なニュアンスのある独特の書き味を得られます。余談ですが、全くメンテナンスがいらないのがガラスペンです。形や色彩が鮮やかでプロの作家の人もみえます。見た目がきれいなので文具店舗のショーケースに飾られることが多いです。欠点としてはクリップがありませんのでよく転がり落とすと簡単に割れてしまいますし手作りなので同じような均一の品質が難しいということです。

水性ボールペンやサインペンにおいても、液体の水性インクを用いるため、ペン先の乾燥に弱く、紙によっては筆跡が滲みやすく、極端な温度・気圧変動や衝撃によってインクが漏れる場合もある。

様々な万年筆のペン先金

万年筆において一般に使用される素材で、ペン先の材質に不可欠な要素である強度と耐薬品性と柔軟性を兼ね備えている。純金（24K）のままでは耐久性に難を残すため各種金属を含む合金の形で使用され、配合率は58.5%（14K）～75.0%（18K）が一般的。耐久性の面では14Kのものが最も優れていると言われるがフランス向けの需要から18Kのものも使用される。かつては、ペン先の金の配合率が高級感や書き味を増すと考えられ、日本国内メーカーを中心に金品位競争が激化した時期があり、最高で

24Kまでエスカレートした。ルテニウムやロジウムでめっきされるものもあり、これらは銀色の仕上がりとなる。

なお、金は弾性に富むが耐摩耗性に劣るので、先端にペンポイントと呼ばれるイリジウム（基本的に現在は用いられていない）およびオスミウムとの合金であるイリドミンの玉が溶接されている。

鉄・ステンレス鋼

金を使用したペン先に比べ柔軟性は劣るが、コストパフォーマンスが優れており量産にも向くため、低価格な商品では多用される。また、製品によっては金めっきされている場合もある。

あまり一般的ではないが、ペんてる『プラマン』シリーズといった使い捨て／部品交換式の製品では、プラスチック製のペン先も使われている。

ペン先の形状

インクをペンポイントに導くと共に弾力を出すためペン先には切り込みが入っており、筆圧をかけたとき不用意に曲がらないよう剛性を出すため若干湾曲させてある構造が一般的。ペン先の切り込みは一般的には切り割りと言い、ハート型や丸形をしているハート穴まで通じている。ハート穴は空気穴となっている場合が多く、筆記によってペン内部より排出されたインクと同量の空気をペン内部に供給している。空気の吸入はハート穴に拠らず、ペン芯に空気穴をあけることによって供給している場合もある。

ペン先は通常異なる太さのものが数種類用意され、EFもしくはXF（極細字）、F（細字）、FM（中細字）、M（中字）、B（太字）、BB（極太字）、C（特太字）、MS（ミュージック）などと表記される。同じ太さでもメーカーや製品ごとの個体差があり、また紙とインクとの相性等にも大きく左右される。

日本メーカーのペン先は、欧米メーカーよりも半段階から一段階程度細く、インク流量も少ない。これは左から横書きする欧文と異なり、便箋に右から和文を縦書きする場合は書かれた文字の上を手がすべるため、インク流量が多いと字がすれて汚れること、線の少ないラテン文字に比べ、画数の多い漢字は細く均一な描線が必要なことなど、日本製のペンが和文筆記の特性を考慮していることによる。

ペン芯

インクタンクからペン先へとインクを導き、またインクタンクに空気を取り込む（気液交換）ための部品をペン芯と呼ぶ。かつて、素材はインクに馴染みやすいエポナイトが使用された。現在ではエポナイト製のペン芯を使用しているメーカーは皆無に等しい。現在は合成樹脂を使用するものが多く、また、その方が精度が高いものを容易に大量生産することが出来る。インクタンクからペン先まで細かいインク溝が掘られており、毛細管現象によりインクが常に供給されると共に、空気の通り道となる空気溝が掘られており、インク供給で下がったタンク内の圧力を大気圧に戻す。ペン芯にはタンクから出たインクを一時的に溜める蛇腹状の溝や櫛溝が掘られており、気圧変動などによるインク漏れを抑える構造となっている。

ペン芯はペンそのものの性能や書き味を左右する重要な部位である。また、工作精度が低い物や、いわゆる“ハズレ”は、この部分に不具合を持っている場合がある。

本体（軸胴部）

万年筆のうち、キャップや胴軸（筆記する際に手で持つ部分）は重量バランスひいては書き味を左右する部分であり、かつてはセルロイド、エポナイト等の軽量な素材が主に使用された。現在は、プラスチックやアクリル製、金属に塗装や鍍金加工を施したものがほとんどであるが、高級万年筆には、耐久性を重視してエポナイトを用いるもの、昔ながらの風合いを重視しセルロイドを用

いるもの、ブライヤー、黒檀、炭素繊維強化プラスチックなどの特殊素材を用いるものがある。

また、高級万年筆には貴金属、宝石で本体を装飾したものもある。日本では、漆塗や蒔絵等の伝統工芸を生かした万年筆が戦前から製作され、特に戦前の並木製作所（現パイロットコーポレーション）の蒔絵万年筆は「NAMIKI（ナミキ）」のブランドで海外に輸出され、高い評価を得ている。

吸入式タイプであるものの多くは、インクタンク内のインク残量を見るための窓（インク窓）が設けられている場合が多い。単に素通し、透明プラスチックがはめ込んであるだけというものも多いが、高級なものではデザインの中に取り込む工夫がなされており、万年筆の意匠を特徴付ける要素の一つともなっている。また完全に無色透明で中の機構を外側から見ることの出来るものもある。ただしカーボン系のインクの場合、表面張力が小さいのでインク窓表面全体にインクが広がり、且つインク自体透光性が低いので、インクの量を確認出来ない場合がある。

インクの種類と組成

一般に万年筆用のインクとしては染料系のインクが用いられており、発色に秀でるが、耐光性・耐水性に乏しい場合が多い。

旧来、万年筆を使用してそれらの性質を必要とする公文書などを書き記す場合、化学反応によって紙に定着するタイプのブルーブラックインク（没食子インクの一つ）が使われてきた。このインクはイオンの状態で鉄を含んでおり、これが酸化されて黒色の沈殿を生じる事によって紙に定着する。この反応が進む様子はインクの色によって知ることができ、筆記直後には比較的青い色をしているものが、日にちが経って反応が進むと次第に黒ずんでくる。このタイプのインクは、強い酸性を示し、金属を侵す事でも知られ、時代につれ生産から撤退するメーカーも少ない。万年筆のペン先として金が多用される理由の一つは、酸性のインクに侵されない耐薬品性の強さである。

顔料系のインクは滲みにくい明瞭な筆跡を持ち、耐水性、耐光性はあるが、インクが乾くと目詰まりを起し万年筆が使えなくなるので敬遠されてきた。製図や漫画の製作その他によく使われるインディアンインクも詰まりやすいことから使えない。現在では万年筆用の超微粒子顔料インクが実用化されているが、洗浄が非常に困難になるので使用に際しては使用後にキャップをする、メンテナンスを怠らないなどの特別の注意を払う必要がある。顔料系インクの使用に適さない万年筆もある。

万年筆のインクには色素成分の他に、界面活性剤が含まれている。界面活性剤は、インク中に含まれる水分の表面張力を低減させペン芯に於けるインクの流れを良くすると同時に紙にインクを染み込み易くさせる役割を果たしている。界面活性剤の量によって染み込み具合が異なるため、ペン芯とインクとの相性や裏抜けといった現象が発生する。

南友会ゴルフコンペ

12月6日(日) 於：鈴鹿カンツリークラブ

優勝	大熊将弘	ドラコン	No.6 岩井純朗	No.16 澤田勝志
準優勝	刀根大士	ニアピン	No.3 大熊将弘	No.7 澤田勝志
3位	松田英明		No.13 大熊将弘	No.17 刀根大士
4位	林 裕行			
5位	何川 高			
6位	岩井純朗			
7位	伊藤孝行			
8位	澤田勝志			
9位	今野信太郎			
10位	西井健之			

